

令和 2(2020)年度 宮崎公立大学学術研究推進助成事業

令和2(2020)年度 宮崎公立大学学術研究推進助成事業

No.	職氏名	研 究 課 題
1	教授 永松 敦	東アジアの中秋節 —景清の命日はなぜ十五夜なのか?!—
2	准教授 (現教授) 松本 祐子	「教育フォーラム」の開催による宮崎公立大学を ハブとする教育ネットワークの構築
3	准教授 川瀬 和也	図書出版助成事業 全体論と一元論 — ヘーゲル哲学体系の核心 —

## 東アジアの中秋節

—景清の命日はなぜ十五夜なのか?!—

[研究代表者]

永松 敦 (宮崎公立大学 教授)

[研究分担者]

項 青 (熊本県立大学 講師)

金 敬淑 (熊本大学 講師)

## I 実施概要

コロナ禍により、現地調査は実施できなかったが、急速に普及したオンライン会議システムによって、日中韓の十五夜研究会、さらには、シンポジウムを開催することができた。中国は中秋節。韓国は秋夕（チュソク）で、ともに、先祖祭祀のため故郷に帰省中で現地からオンライン参加となった。本学と提携校の韓国蔚山大学校の学生（本学への留学予定者）2名（심정엽（沈 桎燁さん）、최은영（崔 恩瑛 チェウンヨンさん））が毎回、ゼミに参加。本学と蔚山大の学生同士は合同の研究発表となった。さらには、シンポジウム当日は中国広西壮族自治区の2大学の教員ともつながり、韓国 EBS（国立教育開発院）元制作局長 金 俊漢氏、民俗学ゼミの学生たちを加えて研究会を実施した。さらには、大阪の在日コリアンの方の参加もあり、朝鮮半島各地の十五夜の伝統行事を現在も受け継がれていることが確認できた。シンポジウムの内容は、本学研究紀要 第28巻第1号に「コロナ禍における大学教育—遠隔授業とオンライン・シンポジウム」と題して報告している。

### 《パネリスト》

項 青（熊本県立大学講師 兼中国語通訳）  
秦 璞（広西大学外国語学院 助教授）  
潘 艶賢（広西民族大学東南アジア学院 助理研研究員）  
김준한 金 俊漢（元韓国 EBS 制作局長）  
이신혜 李 信恵（フリーライター在日朝鮮人 2・5 世）  
김경숙 金 敬淑（熊本大学講師 韓国語通訳）  
심정엽 沈 桎燁 シム ジョンヨプ（蔚山大学校 卒業生）  
최은영 崔 恩瑛 チェ ウンヨン（蔚山大学校 学生）

### ～宮崎公立大学民俗学ゼミ～

古澤 果林・櫻田 真由美・橋口 美空・佐藤 もも・田中 里沙・西 優里  
横山 未羽・王 安琪（留学生）・王 翔宇（留学生）

永松 敦（司会）

## II 本事業実施により得た成果・効果等

今回のシンポジウムによって、日中韓はもとより、広く東南アジアの中秋節にまで話題が広がった。聴講者は平均約 50 名。旧暦 8 月 15 日の十五夜・中秋節・秋夕は同日同時刻に東アジアから東南アジアに共通する伝統行事である。国際交流に貢献するとともに、在日コリアンの方の参加により日本国内における多文化共生にも少しではあるが関わるることができた意義は大きい。国内外の研究者や一般市民も多く参加された。もっとも有意義であったのはコロナ禍に

よって留学の中止が余儀なくされたが、ほぼ半年間ズームによって、民俗学ゼミと韓国蔚山大学校の日本留学予定者との交流が図られたことである。教育的効果は極めて高かったと言える。今後は、中国蘇州大学との連携も視野に入れて活動を広げたいと考えている。なお、本題の「景清の命日はなぜ十五夜なのか？」については、宮崎市地域のお宝発掘・発展・発信事業における「景清フェスタ」が中止となったため関連付けることができなかったが、次年度以後は大宮地域全体とかかわる事業として定着させていく予定である。

「教育フォーラム」の開催による宮崎公立大学を

ハブとする教育ネットワークの構築

[研究代表者]

松本 祐子 (宮崎公立大学 准教授・現教授)

[研究分担者]

竹野 茂 (宮崎公立大学 教授)

野崎 秀正 (宮崎公立大学 准教授・現教授)

寺町 晋哉 (宮崎公立大学 准教授)

## I 実施概要

本事業は、統一テーマを「教室のインタラクション」とし、3つの目的（①英語教育に関して実践に基づく問題点や悩みを共有し、改善や解決を図ること、②英語授業で効果的な活動やアイデアを共有すること、③情報交換を通して、教員間、卒業生と在校生、および大学と地域のネットワークを広げ、相互の親睦を図ること）を掲げてオンライン形式で実施された（令和2年12月19日）。

まず基調講演として、跡見学園女子大学准教授の峰松和子先生から社会文化理論の概要と効果的なプレゼンテーション指導の実践をお話いただいた。

続く実践報告では、本学卒業生で現在教職についておられる加藤耕平先生、門前愛貴先生、徳留慧太先生から、それぞれの教育現場において実践されている「インタラクション」を促進するための活動を発表していただいた。

最後にグループに分かれて、テーマに関する意見交換やネットワーク作りを行い、全体で話し合いの内容を共有した。

## II 本事業実施により得た成果・効果等

本事業により得られた成果は大きく三つ挙げられる。

第一に現在様々な分野で研究・応用がなされている社会文化理論の最新知見を基調講演から学ぶことが出来た点である。新学習指導要領でも重要視されている「主体的・対話的で深い学び」を実現するためにも、社会文化理論の基本概念（Zone of Proximal Development, Guided participation, Scaffolding 等）は多くの示唆を含んでいると思われる。

第二に実践報告を通じて、教室でのインタラクションを活性化させる様々な試みを学ぶことが出来た点である。特に教職課程で学んでいる学部生にとって、教科書では学び得ない、生き生きとした実践を本学卒業生から直接聞くという貴重な機会となり、大きな刺激となったと考える。

第三に意見交換会を通じて、英語教育に関する意見や課題を共有することが出来た点、更に所属校や学年を超えた横のつながりを作ることが出来た点である。

## III 問題点および今後の課題等

今後の課題としては以下二点があげられる。

一つ目は、今回オンライン開催という形式が影響したためか、一般参加（地域住民の方々）が少なかった。本学の地域貢献という観点からも、幅広い層からの参加が可能になるような開催方式やテーマ設定などを今後も考えていく必要があると思われる。

上記に関連して二つ目は、開催時期についてである。12月中旬というのは学部生にとっても、現職の教諭にとってもスケジュール調整が難しい時期である。

事実本学においても複数の行事が同日に行われていた。また一般参加を促すという意味でも、他の開催時期を検討する可能性はあると思われる。



図 書 出 版

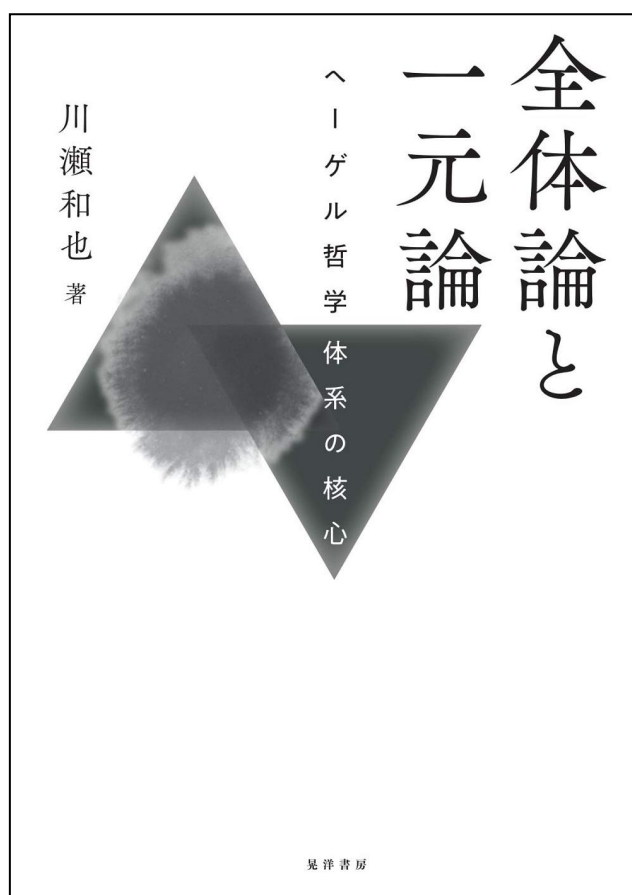
全体論と一元論  
—ヘーゲル哲学体系の核心—

[著 者]

川瀬 和也 (宮崎公立大学 准教授)

## 出版図書概要

出版物の名称：全体論と一元論 ―ヘーゲル哲学体系の核心―  
著者：川瀬 和也（宮崎公立大学 准教授）  
出版日：令和3年3月25日  
判型：A5  
ページ：288 ページ  
ISBN：9784771034914  
出版社：晃洋書房  
定価：4,180 円(税込み)



## 内容説明

なぜ、いまヘーゲル哲学なのか。

認識論と存在論はどのように関係するのか、哲学と科学はどのように関わるべきか、心と身体はどのように関わるのか……。これらの現代哲学の諸問題についてヘーゲル哲学は解決の糸口を与えてくれるかもしれない。

## 著者による著作紹介

本書は、19 世紀はじめのドイツで活躍した哲学者ヘーゲル (1770-1831) の主著『大論理学』(1812-16) の研究書です。ヘーゲルの主著としては 1807 年に書かれた『精神現象学』の方が有名ですが、ヘーゲルが生涯で書いた本の中で最も分厚い本は、実は本書で扱った『大論理学』です。『精神現象学』もとても難しい本ですが、ヘーゲルはある個所で、『精神現象学』を『大論理学』の入門編と位置付けています。この意味で『大論理学』はヘーゲル哲学の「本丸」と言えます。本書には「ヘーゲル哲学体系の核心」という攻めた副題をつけていますが、これは『大論理学』という書物のことを指しています。

本書を書くときに目指していたのは、「自分が大学 4 年生だったころに読みたかった本」を書くことでした。専門家に向けて書いた研究書ですので、哲学に全く触れたことのない方がいきなり読むにはハードルが高い本にはなってしまいます。それでも、なるべくわかりやすく、哲学科で一通りのことを学んだ学生が、ヘーゲルについて本格的に学ぼうと思ったときに手に取ってもらえるような本にすることを目指しました。

哲学史研究には、大きく分けて二つの目標があります。ひとつは、過去の哲学者についての歴史的な事実を明らかにすることです。発見された手書きのノートがヘーゲルの自筆かどうかを調べるような文献学的な研究や、過去の複数の哲学者たちの間の影響関係を明らかにするような研究は、この目標を特に重視した研究といえます。これに対して、もう一つの目標は、時が隔たっているために一読しただけでは十分に理解することが難しい、過去の哲学者の本に書かれた思考の内容を、なるべく正確に理解することです。正確な理解のために有効な方法は、逆説的ですが、現代の哲学で議論されていることと比較し、その文脈の中にヘーゲルの議論を置いてみることです。たしかに一方でこうした研究には、慎重にやらなければ、本来なされていない現代的な議論を過去のテキストに読み込むというアナクロニズム (時代錯誤) に陥る危険もあります。しかし他方で、私たちがいま使っている言葉で過去の哲学者の思考を言い換えられたときに、そのテキストを最も深く理解できたことになるというのも事実で

す。実はヘーゲルという人は、哲学の研究者の間で、過去の哲学者の中でも特に難解な文章を書く人として知られています。本書では、私自身が慣れ親しんでいる現代の言葉で、ヘーゲルの言葉を必ずパラフレーズするよう心掛けました。その作業によって、自分自身のヘーゲル理解が最も深まり、また、ヘーゲルの議論に現代の哲学者たちがアクセスしやすくなると信じているためです。

本書の内容を少し詳しく紹介しましょう。本書は三つの部に分かれています。第1部では、「人間は何をどのように知りうるか？」と問う認識論と「世界には何がどのように存在するのか？」と問う存在論のどちらがより基礎的な哲学研究なのか、という、哲学においてしばしば問われてきた問いを扱っています。私の理解では、ヘーゲルの答えは「どちらでもない」というものです。そもそも、認識論と存在論のどちらかが他方を基礎づけることができる、と考えること自体が間違いのもとであり、そのような企てはすべて失敗する、というのがヘーゲルの見立てです。私たちは基礎づけの誘惑を断ち切って、バランスを取りながらやっていくしかない。このような立場を本書では、「全体論」と呼んでいます。

第2部では、ヘーゲルが『大論理学』で科学について論じていた、ということ指摘しています。ヘーゲルが活躍した時代である19世紀初頭の科学は現代から見るとまだまだ間違いだらけのものでした。ヘーゲルも、現代から見ると間違っているとしか言いようのない様々な科学理論を信奉していました。それにもかかわらず、ヘーゲルは科学と哲学の関係について興味深い議論を提示しています。それは、かみ砕いていえば、科学と哲学は「持ちつ持たれつ」の関係である、ということです。このヘーゲルの視座は、200年の時を経て科学が格段に進歩した現代の私たちにとっても示唆的なものだと言えます。

第3部では、心と身体はどうかかわっているのか、という、哲学で「心身問題」として知られる問題を扱いました。『大論理学』では、心身問題は目的論的な関係として考察されます。この関係は、カール・マルクスの『資本論』の中に、「労働過程論」として取り入れられたことでも知られています。マルクスのような解釈はヘーゲルの議論の応用として示唆に富んでいます。本書ではしかし、ヘーゲルの本来の眼目は、労働のような社会的・経済的な議論を展開することではなく、あくまでも理論哲学の問題としての心身問題を扱うことにあった考えるべきだ、と論じました。さらに、この観点から、ヘーゲルが「生命」の概念に心身問題を解決する力があるはずだという期待を寄せていたことも明らかにしました。

本書には、ヘーゲルの生まれ故郷のドイツだけでなく、アメリカやイギリスといった英語圏で展開されてきた比較的新しいヘーゲル研究の潮流に光を当てているという特徴もあります。本書を通じて、ヘーゲル哲学や、英語圏のヘーゲル研究の魅力を感じていただければと思います。